

4 中空土偶について

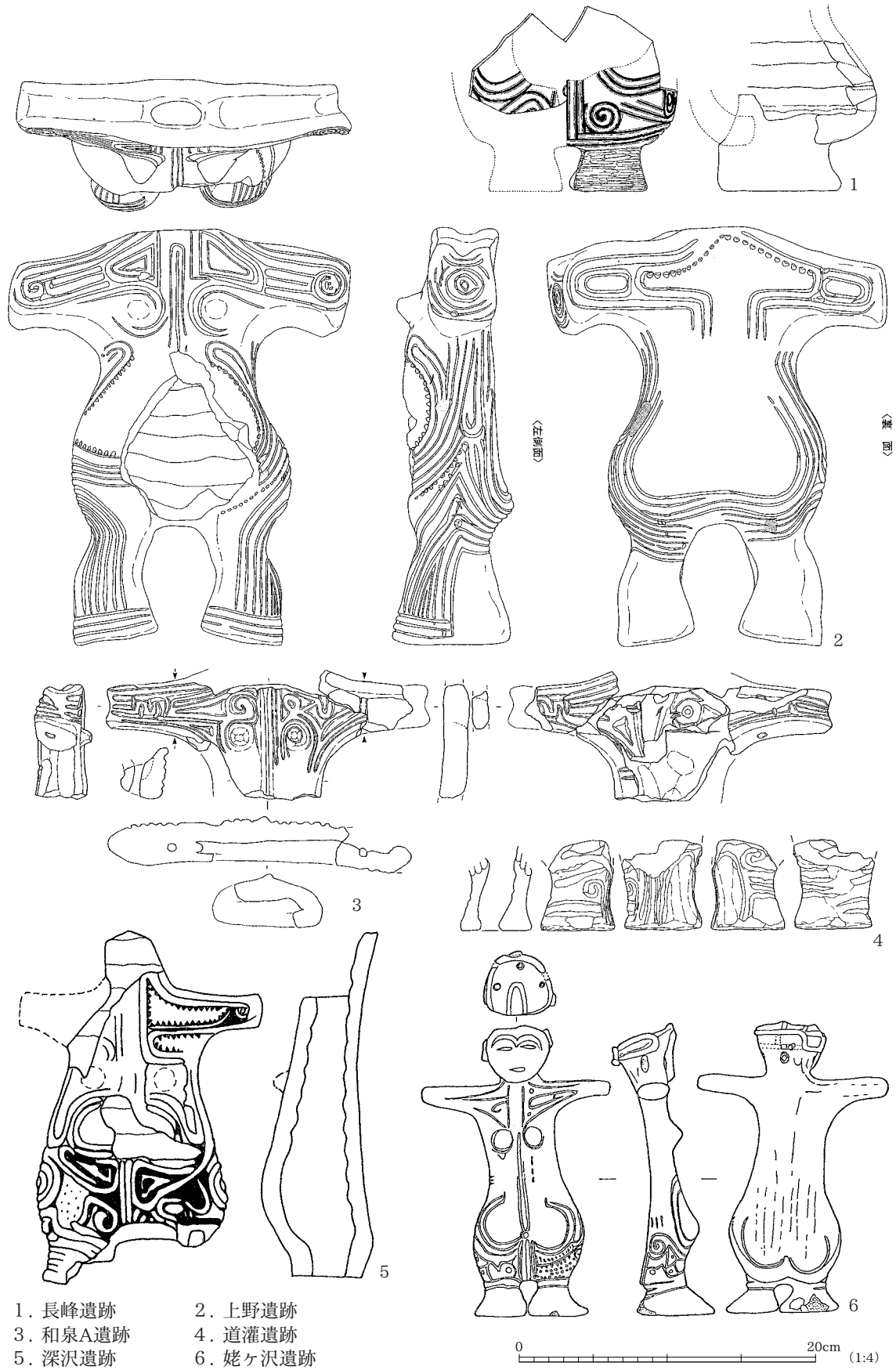
中期前葉の信州北信地域・越後上越地方周辺には、特徴的な中空土偶が分布している。第27図に集成図を載せた。道灌遺跡出土の4は、中空土偶の脚部で粘土紐の輪積みによって成形されている。脚部底面は穴があり、胴部の中空部に続いている。文様は細い棒状工具によって引かれた沈線文による。集合沈線や蕨手状唐草文などが描かれる。これと類似した土偶が津南町上野遺跡〔江坂・可児ほか1962；阿部1998〕、吉川町長峰遺跡〔関・本間ほか前掲〕、中郷村和泉A遺跡〔加藤・荒川前掲〕、長野県では飯山市深沢遺跡〔「土偶とその情報」研究会1996〕などで出土している。上野遺跡の2は、全長28.5cmの大型土偶である。復元高は約36cmと推定されている。粘土紐の輪積みによって成形され、先細りの棒状工具による沈線と連続刺突文を主体とした渦巻文と直線・曲線が土偶の体のラインに沿って描かれている。沈線と連続刺突文の文様構成が五領ヶ台式土器に類似することが指摘され、中期初頭と位置付けられている〔阿部前掲〕。長峰遺跡の1は半截竹管による半隆起線文と渦巻文が描かれている。和泉A遺跡の3は上野遺跡の2とよく類似している。形態は、長く延びる腕を持つ十字で、断面は扁平である。成形も粘土紐の輪積みにより、文様も先細りの棒状工具による。上半部の文様構成も類似し、渦巻きや直線などが描かれる。長野県側では、5の深沢遺跡例がある。粘土紐の輪積みによる成形である。実見していないため、施文方法などの特徴を捉えていないが、沈線文に類似点が見られる。6の長野県中野市姥ヶ沢遺跡の土偶は中空土偶ではない〔金井1983〕。しかし、腕を水平にした十字形態や簡略化されているが、施文されている文様が沈線による曲線・直線であるなど、ほかの中空土偶に類似した点が多く見られる。

これらの中空土偶などは、中期初頭または前葉の遺跡から出土している。成形は粘土紐輪積みにより、外面はていねいに整形されるが、内面は輪積み痕が明瞭に残る。比較的大型のことが多い。文様施文は先細りの棒状工具による沈線で描かれる渦巻きや直線・曲線の沈線文が主体である。長峰遺跡出土の1は工具が半截竹管により、ほかの土偶と区別されるが、これは海岸部に近く北陸的な影響が強いためと思われる。分布範囲は長野県の北信地域から新潟県の上越地方に限られ、地域的な出土状況を示している。第25図に示したように、この分布範囲は深沢遺跡第2類土器の分布範囲と重なり、両者は密接な関係にあると思われる。深沢遺跡第2類土器に大型の中空土偶が伴う可能性が指摘できるとと思われる。

5 石器について

A 中期初頭～前葉の石器組成

道灌遺跡から出土した石器は、第3表のとおり総数229点である。このうち器種石器の未成品、剥片類、石核を除いたいわゆる器種石器は164点である。このほか、石製品が3点出土している。これらの石器・石製品は伴出土器から縄文時代早期前葉、前期前半、中期初頭～前葉、後晩期、及び古代以降のいずれかの時期に所属する。土器量を詳細に見れば重量別では、中期初頭～前葉87.0%（125.6kg）、後晩期0.6%（0.9kg）、前期0.1%（0.1kg）、早期前葉（押型文）0.0%（24.8g）、土師器・須恵器12.4%（17.9kg）となる。古代の土師器・須恵器に伴う石器は、砥石の一部にその可能性があるものの、ほかは皆無と見られる。したがって、石器の多くが縄文時代中期初頭～前葉に所属する。したがって、第3表は広範囲な時期の石器・石製品を含みつつも、中期初頭～前葉の石器組成をほぼ反映しているといえよう。



第27図 信越国境付近出土の中空土偶等